校長室だより～燦燦～ №１２０

学び

2020.5.27

「主体的・対話的で深い学び」という言葉がある。ここ数年来、学校の先生方が授業をする際に一番意識している言葉ではないかと思う。一般的には「アクティブ・ラーニング」という言葉の方が広まっているかもしれない。

先生方が授業を行っていく際には、生徒にこうなってほしい、こういう力をつけてほしい、つけさせたいという思いがある。主体的・対話的で深い学びとはいうが、一体、生徒たちにどういう姿が見えれば、主体的・対話的で深い学びにつながっていると考えられるのか。

次世代教育推進センタープロジェクト研究というものがある。そこでは、主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程の質的改善により実現したい子どもの姿として､次のものを示している。

主体的な学びでは、興味や関心を高める、見通しを持つ、自分と結び付ける、粘り強く取り組む、振り返って次へつなげるとある。

本校の先生方は、少しでも生徒たちに興味を持ってもらおうと、授業の導入に工夫を凝らしている。生徒の生活と結び付けて教材を提示したり、生徒が興味や関心を持っている話題を出したりしている。

一方、見通しを持つ、振り返って次へとつなげるは、やや弱いかもしれない。そもそも授業の終末に振り返りのための時間を確保しなければならない。これが実際には、なかなかむずかしいのが現実である。

対話的な学びでは、互いの考えを比較する、多様な情報を収集する、思考を表現に置き換える、多様な手段で説明する、先哲の考え方を手掛かりとする、共に考えを創り上げる、協働して課題解決するとある。

３つの学びのうちで、本校の生徒に最も経験させたいのが、この対話的な学びである。しかし、新型コロナウイルス感染症対策のため、長時間にわたるグループ学習はまだできない状況にある。それでも限られた状況の中で、対話的な学びを進めていかなければならない。制限があればあるほど、工夫が生まれるのも事実である。

本校の生徒には、特に、思考を表現に置き換えることと、多様な手段で説明することを繰り返し何度も何度も行わせたい。そして、できれば、共に考えを創り上げる、協働して課題解決することもたくさん経験させたい。これらの活動は、きっと社会に出てから直接役に立つはずである。また、就職活動においても力を発揮するものと思われる。

深い学びでは、思考して問い続ける、知識・技能を習得する、知識・技能を活用する、自分の思いや考えと結び付ける、知識や技能を概念化する、自分の考えを形成する、新たなものを創り上げるとある。

授業では、じっくりと考えさせる時間を確保したい。できる限り多く考える経験をさせたい。表現するには、まずは自分の考えがなければならない。そして、できれば新たなものを創り上げる経験をさせたい。深い学びは、そう簡単なものではない。意図的かつ計画的な日々の授業が必要となる。授業を行う教員が、自分の授業における深い学びのイメージを持っていなければならない。目指す生徒像ともいえるものである。これからも本校ならではの深い学びを追求していきたい。